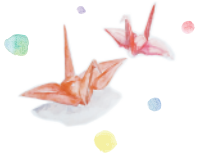
オンラインで失われた教育機会

人々の生活を一変させたコロナ禍。人と直接会う機会は減り、オンライン上で会うことが増えていきました。働き方にも大きく変化をもたらし、テレワークが急速に広まりました。人流抑制が緩和されてもテレワークが中心の企業も見受けられます。オンラインは働き方や生活に新たな可能性を見出しましたが、オンラインで失ったものもあります。人材育成の観点から、対面の有効性をお話したいと思います。



例年、大学3年生のこの時期は、就職活動を始めている時期ですが、令和4年の大学3年生の傾向は少し違うようです。コロナ禍の影響で1、2年生のときに自粛を余儀なくされた彼らは、全国旅行割などの世の中の流れもあり、就職活動よりも遊びに一生懸命だそうです。一方で2年間あまり通えなかったことで、学校に行くのが楽しい大学生も多いようです。

ある経営者から聞いた話では、最終選考でアピール動画を作る課題を出すと、とても素晴らしい動画を作るそうですが、対面の経験は少ないため実際に会うと声が小さく、動画のような明るさを感じないことも多いようです。

プレスタに通う大学生も、最初は声が小さい方が多いです。それでも「しがく式」を学ぶと2カ月ほどで明るく元気にスピーチができるようになります。さらに、150名ほどの意欲のある学生には室舘塾ユースで定期的に教育をしています。教育内容の一部を紹介すると、まず講義を聴くときはマスクを外して聴くように指示をします。もちろん隣の人と意見交換をするときには着用させます。話す側は表情が見えた方が話しやすいので、必要に応じて変えています。ちなみにこのやり方でクラスターを出したことはありません。学生には、周りに合わせるだけでなく、自分で考えて決断する大切さを教えています。

初参加者は前に立って、自己紹介をしてもらいます。終わって席に戻るときに私の前を素通りするようであれば指導します。目上の人の前を横切るときに、立ち止まって挨拶をする必要はありませんが、目礼や少し頭を下げて歩くなど気を遣うことは必要だからです。これはオンラインの集まりでは教えることはできません。

先日は拍手についても教えました。講演会で、司会者とメインスピーカーへの拍手が同じでは心が伝わりません。主役への拍手を100とすれば、それ以外の拍手はある程度控えめにすることが主役への敬意になるからです。ペンを持ったままの拍手も同様です。心を込めて送った拍手だったとしても、相手からはメモをとる片手間で拍手をしているように見えてしまいます。このように、オンラインでは拍手まで指導することはなかなか難しいと思います。

対面で会えば、相手の動きが全て見えるので細かな指導もできますが、オンラインではせいぜい顔しか見えず、画面を消されたら何も指導することはできません。

だからこそコロナ禍でも、感染対策を徹底した上で対面での教育にこだわってきました。対面での教育に応えてくれた学生たちは、これから入社する会社で明るく元気に社会人生活をスタートさせることでしょう。対面での教育にはリスクはありますが、若い大切な時期にリーダーシップの基礎を身につける上では必要なリスクと思って実行して良かったと思います。コロナ禍の学生と言えども、教育の機会をつくることで立派な若者が育っています。学生だけでなく社会人の皆さんも「コロナ禍」という言葉に思考停止せず、自分の頭で考え、社会のため、日本の未来のために行動していってください。

(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長
MURODATE Isao **室舘 勲**

2003年株式会社キャリアコンサルティングを設立。ブータン王国王立マネジメント大学など講演実績多数。全国社内木鶏経営者会 副会長。ミス・ワールド・ジャパン講師・審査員。著書に『夢を見て 夢を叶えて 夢になる』(致知出版社)、『まずは上司を勝たせなさい』(講談社)、『「応援される人」になりなさい』(ワック)がある。